神無月の女（かんなづき）

禁裏御付武士事件簿

澤田ふじ子

神無月（かんなづき）の女

禁裏 御付武士事件簿

澤田ふじ子

実業之日本社

神無月の女　禁裏　御付武士事件簿

一九九一年一月三十日　初版発行

著者　澤田ふじ子

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〇三(三五六二)二〇五一(編集)
TEL　〇三(三五三五)四四四一(販売)
振替東京一―三二六　〒一〇四

支局　大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六(三一一二)一五七三

印刷　大日本印刷　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN4-408-53142-1

©F.Sawada　1991
Printed in Japan

神無月の女／目次

短夜の首……5
神無月の女……37
はかまだれ……71
名椿の壺……105
野狐……137
鬼の火……171
風がくれた赤ん坊……205

カバー装画／三谷一馬
装幀／安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神無月（かんなづき）の女

禁裏　御付武士事件簿

短夜(みじかよ)の首(くび)

一

連日、雨がしとしと降っている。

旧暦五月中旬、京都は祇園まつりの仕度がはじまると同時に梅雨になり、水にぬれた青葉の緑が、まわりのものをすべて染めてしまうほど濃く見えた。

六尺棒をにぎり、寺町御門のわきに立つ久隅平八は、大きな欠伸を掌で隠し手指で両目の滴をおさえた。

「まったくよく降りよる。耳のなかにまで黴が生えそうじゃ。いい加減にやまぬものか。これでは気持まで鬱陶しくなってくる」

かれはつっ立ったまま、相役の高田喜四内につぶやいた。

喜四内は小柄で猪首、扁平な顔はいつも翁面のように笑い、脛巾をつけた足が短かった。

「雨の日もすでに六日、空にはそろそろ降る水もあるまいて。あすあたりは天気もよくなろうし、がまん、がまんじゃ。それよりおぬし、ここ五日、休みなしの立勤めであきがきたのじゃろう。わしなどとはちがい、まだ二十六だでなあ」

喜四内は四十すぎになる。

御所の東、寺町荒神口の御付（禁裏付）組屋敷の長屋には、妻のたけと男女の子どもが、かれ

の帰りを待っている。

それにくらべ平八は、喜四内と同じ「参の組」長屋に住んではいるが、家には母親のつがと妹のかやがいるだけで、まだ妻を娶っていなかった。

二十六だでなあとつぶやく喜四内の言葉には、若い血がさわぐのだろうといいそえたいひびきがうかがわれた。

先ほどまで仙洞御所のなかから、小倉百人一首の札取りの声がかすかにきこえていた。仙洞御所とは、退位後の上皇が住まわれる御所をいう。広さは禁裏とこの仙洞御所をふくめ、現在の京都御所の三分の一ほどと考えればよかろう。

いっとき札取りはやんだかに思えたが、また新たにはじめられたのか、今度は野太く歌札をよむ声が、やはりかすかに流れてきた。

寺町御門から仙洞御所内までは遠いが、あたりが静かなだけに、声がよくとどくのだ。

――長からむ心もしらず黒髪の　みだれて今朝はものをこそ思へ

顔も知らぬ公卿の若い声が、待賢門院堀河の閨怨の歌をよみかけると、平八はこころのなかで即座に下の句をつづけた。

わしならすぐに札を取ってみせる。

耳をすませても、上がりの返事はなかなかきこえてこない。かれは口許に小さく憫笑をうかべた。

はいと澄んだ女の声がひびいたとき、平八の眼裏の奥で文字札がさっと撥ねられるのといっしょに、お菊の白い手の指や二の腕がなまめかしくひらめいた。彼女が自分の胸のなかで、白い喉をのけぞらしている姿もうかんできた。

今日、七つ（午後四時）までの勤めを終えたら、組頭冨田清五郎の許を訪れ、長屋にもどり身づくろいをする。そして四条高瀬川筋の旅籠「若狭屋」へ出かけていく。そこが菊の家であった。

「久隅平八の奴、御門勤めの態度はまあよいとして、非番のときは酒をくらい、女子の店に入りびたっているそうじゃ。まさかお上から仰せつかっている自分のお役目を、忘れたわけではあるまいな。あの分では、女子や親父にしこたま貢がせているのであろう。組頭や御付総組頭さまから、お叱りがないのがふしぎなくらいじゃ」

禁裏の警固につく御付武士は、上と下の二組にわけられ、一つの組に与力十騎、同心五十人ほどが属している。上、下の組とも、同心は「壱」から「伍」まで五つの組にわけられ、御付組屋敷の長屋も別棟になっていた。勤務は日替りと五日勤めがあり、禁裏の各門と仙洞御所の東と南の門に主として配された。

五日つづけての勤めをすませれば、組頭から五日の休暇があたえられる。

組頭は二人の与力があたり、「参の組」は山村藤右衛門と冨田清五郎が勤めていた。

平八の悪評をのべる同心たちがいうお上とは、天皇の東山帝ではなく、徳川五代将軍綱吉を指した。かれらにとって天皇家や公家勢力は、警戒、監視すべき相手だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今年の三月、遠い江戸城、松の廊下で、赤穂城主浅野内匠頭長矩が刃傷事件を起して藩は取りつぶされ、世情はなんとなくざわめいている。どんな勢力が天皇をかつぎだし、幕府に対して謀反を企てないともかぎらない。禁裏（朝廷）さまから片時も目を離すなと、つい先頃もきびしいお沙汰が改めて下されたばかりであった。

徳川幕府が二代将軍秀忠の時代から、朝廷を内部から監視するため、忍びにたけた伊賀衆や根来衆を配していたことは、あまり知られていない。最初かれらは元和六年六月十八日、徳川和子が後水尾天皇のもとに入内したとき、女御の付人に化けて禁裏の内部に送りこまれた。

当時、徳川幕府の基礎はまだまだ軟弱、朝廷との間は、政治権力をめぐって険悪な状況がつづいていた。幕府は「紫衣法度」「禁中并公家諸法度」などを発して、朝廷の権限をそいできたが、英明な後水尾天皇をいただく朝廷勢力には寸時も気がゆるせない状態であった。

特命をおび、朝廷の内部に送られた伊賀・根来衆たちは、京都所司代を通じ、朝廷内部のできごとや公卿たちの生活を、江戸幕府に逐一報告した。幕府はそれにもとづき、朝廷政策を立てていた。寛永二十年九月一日、それまで隠されていたこの役目が、幕府の職制をもって正式になる。禁裏付として旗本高木守久、天野長信の二人が、役料千五百俵、それぞれに与力十騎、同心四十人をあたえられ、京都にむかわされた。禁裏・仙洞御所の警固と、財務の世話を名目にしてだが、本当のところは公然と朝廷勢力を監視しはじめたのである。

江戸幕府ではかれらを禁裏付といったが、朝廷側では御付武士――と品よく呼んでいた。

禁裏付発足を『徳川実紀』寛永二十年九月の条は、――けふ禁裏付高木善七郎守久、天野豊前守長信に御黒印の条約を下さる。（中略）万事京職（所司代）板倉周防守重宗の指揮に任すべし。何事によらず守久、長信商議し、若し思慮に及びがたき事あらば、京職にうかがひて決すべし。（中略）禁中常に出入する表裏の三門は、隊下の同心をして守らしめ、警火おこたるべからず。（中略）堂上及び女房等幷に地下諸役人に至るまで、先規の作法にそむくものあるか、又は新規のことは、京職に告て江府へ聞えあぐべしとなり――と記している。

指図の基本はおとなしいが、裏には朝廷が幕府に敵対する気配を見せれば、隠密裡に処理せよとの意向がうかがわれる。

承応三年九月二十日、後水尾院の子後光明天皇が、二十二歳の若さで突然、疱瘡（天然痘）で崩御されたのも、天皇が父後水尾院に似て英明、峻烈であり、それをおそれた幕府が、御付武士に命じて謀殺させたのではないかとの噂が、京童のなかでささやかれたほどだった。

禁裏付は幕府への忠誠心がもっとも強い中堅旗本から選ばれ、かれらは妻子をともない京に赴任してきた。上の御付は相国寺南門前東側、下の御付は寺町荒神口北東角に屋敷を構えた。与力、同心は御付組屋敷の長屋に住んだ。

二人の御付頭は一月交代で勤務につき、朝四つ（午前十時）ごろ、同心二人、徒士三人、近習、小者をしたがえ、槍を立て乗物にのって御所に出かけ、伺候之間に入るのである。

当初、禁裏や仙洞御所の各門を警固する与力や同心たちの姿にふれた堂上公家たちは、おぞま

しい者がいるといわんばかりの目で眺めたものだが、御付武士発足から五十数年もたったいまでは、多くがさして気にかけなくなっていた。

天皇家や自分たち公家衆は、幕府に庇護されてのうのうと平安息災に日を送っている。歳月がすぎるにつれ、それでいいのだという気持をいだく堂上公家がふえていた。

久隅平八たちが諸門の番所に詰めていると、近くの公家屋敷から、子どもたちがときどき門のそばまでおそるおそるやってくる。

顔馴染みになれば、笑顔で言葉をかけ、手近にある材料で竹笛の一つや凧などもつくってやった。

「できるかぎり阿呆で能なし、人のいい門番を装え。相手をどこまでも油断させておくのじゃ。忍びの心得など、かまえて見せるでないぞよ」

それが仙洞御所付きの役目を、平八にゆだねたおり、父甚左衛門からいわれた言葉であった。父親はその一年後に卒した。

平八の祖父は、東福門院和子の付人として上洛してきた。父甚左衛門が跡を継ぎ、平八は御付組屋敷の長屋で生れ、四歳になったとき、幕府直轄領甲斐の多羅尾にやられた。隠士の大森捜雲から武芸百般と隠密のわざをみっちり修行させられたあと、三年前、京にもどされてきたのである。

「甚左衛門が隠居を願い出てきたゆえ、そなたを呼びもどしたのだが、なかなか茫洋としてよい面構えじゃ。きびしい修行にも似ず、眼許の涼しいのや、色白なところがまことに工合がよいわ

い。万事を心得、所司代や町奉行所の衆とも遺漏なくやってくれ」

組頭の冨田清五郎が、平八の容貌をしげしげと眺め、にんまりして声をかけた。

御付同心の子として生れた男子は、四、五歳になると、資質や器量を見定められたうえ、組頭の指図で多羅尾の地にやられる。または江戸の柳生家に預けられる者もいた。

二十をすぎたころ、ぼつぼつ京にもどされる。家の跡を継いで同心になるが、職務の特殊性から町衆との交際は極力さけ、妻は仲間のなかから迎える。どんな謂があるのか、女子たちには一様に植物の名をつけるのを習わしとし、俸給は二十人扶持（約百俵、三十六石）だった。

それでも役目柄、相続は永代におよび、器量しだいで、組頭や御付総組頭から特別な任務や扶持があたえられる。なかには与力や旗本に取り立てられる者もあった。

御付同心の朋輩たちが、平八はお役目を忘れたのではないかと謗るのは、町衆との親密な交際を禁じる組の法度をいっているのであり、本来なら平八には、組頭や御付総組頭から当然きびしい処置が下されるはずだった。

しかしかれらは知らないが、旅籠の若狭屋は、将軍家光の時代、二十二騎の与力をひきい、側近の切れ者として由井正雪の乱の摘発に当った中根正盛が、秘かに配した〈市隠〉だったのである。

平八に武芸を学ばせた大森捜雲にも、中根正盛の息がかかっている。正盛は諸大名の動静を調べ、将軍家光に報告する。五千石をいただき、評定所に出席して、幕府や諸奉行の発言を筆記す

る資格をあたえられていたという。平八が見るところ、中根正盛が生前にめぐらした諜報や監察の網は、幕府永続を願う官僚たちに受け継がれ、いまも全国で巧妙に生きつづけていた。

五日の休みもまるっきりの休暇ではない。若狭屋で服装を変え、〈市歩〉をする。

乞食にも行商人にも、また虚無僧や遊芸人にもなった。

――同じ御付同心でも、凡々とすごされてきた喜四内どのにはわかるまいが、さしずめわしなど、中根正盛さまがあの世から動かされている駒の一つだろうよ。

平八は欠伸をこらえ、雨雲につつまれた東山に目を投げた。

黒雲が、如意ヶ岳（大文字の山）の頂を素速く南にかすめていった。

「平八、月山の典侍さまがおもどりじゃ」

高田喜四内の声にうながされ、平八が寺町通りのほうを眺めると、美しく塗られた女駕籠が、雨合羽をまとった青侍とお供の御末たちをしたがえ、御門口をめざしていた。

典侍は略してすけとも、てんじともいう。

天皇や院のおそばに仕え、身のまわりの世話をもうしあげる。家格の高い公卿の家から選ばれ、俸禄は百二十石だった。

月山の典侍は三十なかばをすぎ、すごみのある美貌をそなえていた。

仙洞御所の北には、新上西門院が住む女御御所があり、東宮御所（慶仁親王）、中宮御所（皇后幸子内親王）などが、あたりに構えられている。彼女はそれらの御所にまで、力をおよぼして

いるとの噂があった。
今日は昼前、十日詣でのため東山の菩提寺に行くと、仙洞御所をあとにしたのである。
「典侍さまのおもどり――」
平八は御門口わきの番所にむかい、わざと語尾を長くひっぱり大声をかけた。
これが身分の高い女官を迎える習わしとされ、女官たちは駕籠の戸を細く開けて人態を見せる。
番所から与力の山村藤右衛門がのっそりあらわれ、おくれて同心の青山半助がとびだしてきた。
女駕籠は戸を細く開けたまま、御付与力や同心たちが頭を低くたれるまえを、足早に御門をくぐっていった。
――いやな目付きで見やがる。
平八はまた欠伸が出そうになるのをこらえ、頭を下げたまま、こころのなかでつぶやいた。
それは月山の典侍に仕える青侍の神宮左之助が、自分にあびせる鋭い視線を指していた。かれは日に二、三度御門を出入りする。
平八ほどになると、顔を伏せていても、相手の動きや目付きぐらいわかるのである。

二

汗の臭いのこもった熱気が、部屋にみちていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com